

人と人をつなぐ特別活動

—— よりよい人間関係づくりを目指して ——

特別活動研究会議

研究員 西種子田 健作（川崎市立田島小学校）

片山 健（川崎市立向丘小学校）

中村 晃紘（川崎市立中原中学校）

伊之口 有（川崎市立東高津中学校）

指導主事 小堤 紀子

I 主題設定の理由

学習指導要領において、特別活動の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団（や社会）の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己（人間として）の生き方についての考え（自覚）を深め、自己を生かす能力を養う。」と明記されている。新たに「人間関係」という文言が追加された通り、現在の子どもたちは好ましい人間関係を築きにくいことや、望ましい集団活動を通じた社会性が身に付けられていないことが多く指摘されている。

近年、都市化、少子高齢化、地域社会における人間関係の希薄化が問題となっている。家庭や地域社会において社会性を身に付ける機会が減少しているともいえる。児童生徒の人間関係が未熟なため、仲間とともに自主的・自発的に問題を乗り越えようとする意識が低く、大人の介入や指示を待つ形となっていることが、集団活動を通じた社会性が身に付けられていないと指摘される理由ではないだろうか。

特別活動として、こうした現状に対する改善の手立てとして、集団の一員としての「つながり」が必要なのではないかと考えた。そこで、個と個の「つながり」を強め、様々な関わりの場を設定し、集団で共同の活動を行うことによりさらに関係は深められると考えた。互いがどのように考え、どのような思いをもっているのかを共有し合うなどの振り返りの場を重視し、より内面的な部分までも知るような活動が必要ではないかと考えた。このことにより、本研究の主題を『人と人をつなぐ特別活動 ～よりよい人間関係づくりを目指して～』と設定した。

II 研究の内容

1 研究の経過

本研究会議が小・中学校合同のものであることを踏まえ、まず小中学校の子どもたちの「つながり」から共通点や相違点を探した。実践や各自が考える現状を報告し合い、その中から共通の問題点を見つけた。共通の「つながり」を求める場面設定について話し合い、解決に向けて各自が取り組む新たな実践を考えることとした。

小中学校の共通の問題点として、子ども同士のつながり、人間関係を築く力の低さが挙げられた。そこで、日常生活や行事等における望ましい集団活動を通して、自分の思いを表現し合うことにより、よりよい人間関係を築く力が育まれると考えた。そのための教師の手立てとして、日常生活や行事等において、個々の思いや考えを表現し、互いを知り、関わり、気持ちを伝える環境と、それらを表現する場の設定を意識した。小中学校の特性を生かしながら実践を行い、児童生徒の変容を見とることとした。

中学校3年生での実践

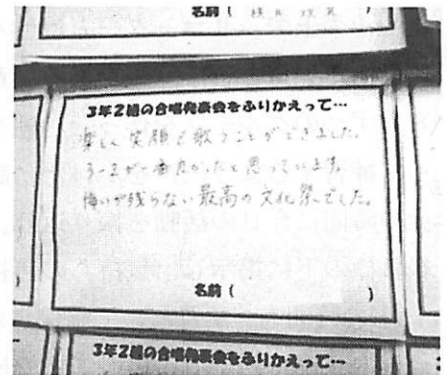
① はじめに

生徒達は学校生活の中で、友達と楽しく過ごしたことや授業でとても疲れたこと、行事で充実感を得たこと、失敗して落ち込んだことなど様々なことを感じながら過ごしている。それらの思いは、どこかの場面で言葉として発せられるか、個々の心の中に浮かんで消えていく、ということがほとんどである。しかし、その思いと一緒に過ごす仲間伝わったり、共有されたりすること、特に『前向きな思い』を共有することが、それぞれのつながりを強め、良好な人間関係を築いていくきっかけとなるのではないかと考え、次のような実践を行った。

② 子ども同士をつなぐ手立て

ア みんなの思い

新しいクラスメイトと出会った日、学級目標が決まった日、席替えをした日、行事に向けて取組を始めた日、行事が終わった日など、生徒たちが心を動かし、普段以上に何かを感じたであろう日に、それぞれが感じたことを小さな紙に書いて教室の中に掲示し気持ちの可視化を行った。小さな紙には自分の思いやクラスみんなに伝えたいことなどを自由に書くことができたようにした。



イ 1分間スピーチ

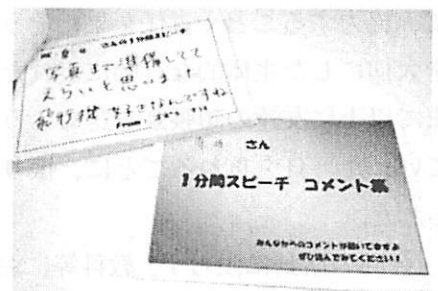
帰りの会の中で、1分間のスピーチを行った。テーマについては自由で、毎日1人ずつ順番に発表した。人前で話をするだけでなく、聞いた生徒全員がコメント用紙にスピーチの感想やコメントを書いた。コメント用紙は回収して、スピーチをした生徒に渡した。このようにして一方的にスピーチを発信するだけでなく、コメントを返す形で双方向からのつながりをもたせ表現する気持ちの可視化を行った。

③ 成果と課題

「みんなの思い」は、教室に掲示されるという前提で行っているため、読むと楽しくなる内容、クラスの仲間としてうれしく感じる内容など、肯定的なメッセージが多く含まれていた。掲示された「みんなの思い」を見て、友達の思いを知り、それが会話のきっかけとなることもあった。クラス全員にあえて発言してまで伝えるほどではないが、少しだけ伝えたいことや聞いてほしいことなどが程よく含まれていて、さりげなくクラスの雰囲気明るくし、コミュニケーションのきっかけとなった。



一方、「1分間スピーチ」は、全員の前で話さなければならない、そのスピーチからみんなのコメントが返ってくる、という形にしたことで「みんなの思い」よりも相手意識があり、きちんと準備されている話が多かった。そのため、生徒にとって1分間スピーチは興味深く楽しみな時間となり、有意義な活動であると感じた。また、コメント集を通して、普段関わりが少ない友達からも「〇〇さんって、〇〇な人だったんですね。」というような内容のメッセージもあり、他者理解につながっているようであった。また、スピーチ後もその話題がクラス共通の話題となることも大きな意義であると感じた。



(2)行事での取り組み

小学校3年生での実践（学習発表会に向けて、音楽の練習をグループ活動で行う実践）

① はじめに

学校行事に向けて、学級での取組の中で、めあてに向かって積極的な関わりや互いの役割・責任を果たそうとし、子ども達が意識して努力し、主体的に取り組む自主的、実践的な態度を育成したいと考えた。

② 子ども同士をつなぐ手立て

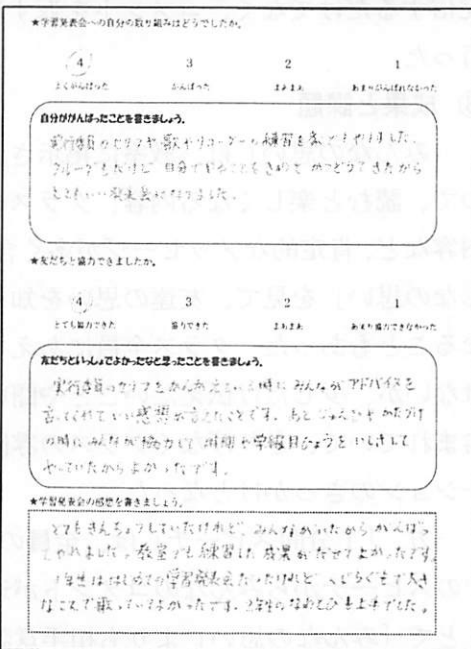
子ども達は、目指す姿や目標が明確であるほど熱心に取り組む。そこで、まず行ったことは学級目標を確認することであった。その上で、リコーダーと鍵盤ハーモニカのパートごとに自信がある児童と苦手意識がある児童とのバランスを考え、7・8人ずつのグループを作った。朝や中休み、清掃後の時間を使って練習するように声をかけた。認め合いの場として、帰りの会の時間に今日の活動を振り返り、カードに記入したものを学級目標の下に掲示し、気持ちの可視化を図った。

どの時間も、学習として確保された時間ではないため、それぞれの登校時刻や清掃場所ごとの掃除が終わる時刻など、時間を意識することが必要であった。また、休み時間は遊ぶことを優先したり、係活動の準備をしたりして、全員がそろって活動することの難しさを子どもたち自身が感じるようになった。そこで、担任は活動時間の前になると声をかけ、同じ場所で見守るようにした。また、朝の会や帰りの会で、担任が見取った様子や振り返りカードの中から、学級目標に近づく望ましい姿や演奏が上達している様子を褒めながら伝えるようにするとともに、子ども達にとっての課題となる部分について話し合う時間をとり、表現する場を設定した。

③ 成果と課題

演奏の上達はもちろんのこと、意外な成果が見られた。それは、子ども達の登校時刻や清掃を終わらせる時刻がそろってきたことである。係活動の準備や遊びの場面も声をかけ合い、約束したことを大切にすることが見られた。友達との活動を通して、協力することや責任を果たそうとする意識が強まり、時間を大切にしたい主体的な行動に表れたと考えられる。また、これまで以上に友達の頑張りを認めようとする態度や声かけが増えていった。日を重ねるごとに、振り返りカードの内容に広がりが見られ、互いにたたえ合う様子が見られた。

今回の活動に限らず、教科等においてもグループ活動は行っている。今まで以上に望ましい人間関係を形成し、自主的、実践的な態度を育むには、目的意識をもち、互いを認め合い、次への課題意識をもつことが求められる。そのためにも、担任は、子どもたちの様子を見とり、話し合いの場面を設定し、子どもたちの成長を褒めながら伝えることが大切だと感じた。



中学校3年生での実践(合唱コンクールに向けて目標の設定とその達成のためのグループ活動の実践)

① はじめに

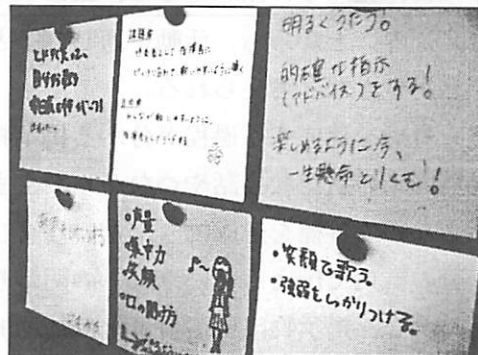
中学校において、体育祭や合唱コンクールなどの学校行事は、目標に向かって学年や学級が集団で取り組む活動であり、よりよい人間関係を構築することに目標の重点が置かれる。ときに活動の方向性を見失って意欲を喪失したり、人間関係にもつれを生じたりすることもあるが、教師の計画的な支援と指導によって、学級、学校への所属意識を高め、まとまりのある学級、学校へと成長していく。

そのための手立てとして、安心して自分を出せる、意見を大切に扱ってもらえる場面、互いのよさに気付くことができ、認め合う場面を重視する活動を考えた。

② 子ども同士をつなぐ手立て

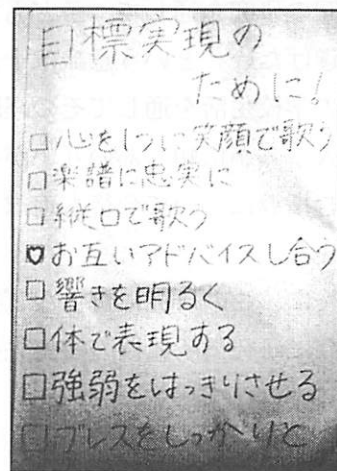
合唱練習に入る前に、合唱コンクールを通してどのような学級を目指したいかを全員で話し合った。子どもたちは「自分の考えや思っていることをきちんと伝え合う関係の中で、よりよい合唱をつくる」という目標を設定した。

その後、個人目標、パートの目標を決定した。その際、個人目標カードや目標達成度確認シートを作成し学級内に掲示することで、課題を達成することが目で見てわかるような気持ちの可視化を図った。また、毎回の練習のあとに、パートごとに振り返りの時間を設け、目標の達成度や課題は何かを話し合った。個人個人でできていること、できていないことの差があるため、個人目標カードを練習時に確認しながら、互いにアドバイスしあう場面が見られた。



<事後の生徒の感想>

- ・人の失敗を誰も責めず、色々な人がアドバイスしあえた。
- ・パートごとに話し合いを重ね、目標を確認し合えたことがよかった。
- ・課題点を発表しあったり、意見交換をしたりしたことで、課題点をどんどん減らせた。
- ・1、2年生の時もよく頑張ったし、達成感もあったけど、今年が一番やりきれたし、みんなで頑張れたと思う。
- ・何がいけなかったのか(なぜ金賞をとれなかったのか)いまだに分かりません。しかし、合唱をとおして前よりももっとクラスの子と仲良くなれた気がします。



③ 成果と課題

合唱コンクールという一つの行事の中でも、目標設定の場面、達成度の確認の場面、達成のためのアドバイスの場面など、意図的に子ども同士をつなぐ場面を設定することができた。活動の様子や事後の感想からも共に協力し、支え合おうとする望ましい人間関係が構築されつつあると考えられる。

今回は中学3年生の合唱コンクールにおける実践だが、行事の特質に応じて、話し合い活動に必要な技能を身に付けているかによって、教師の適切な指導助言が必要であると考えられる。

Ⅲ 研究のまとめ

今回は、「よりよい人間関係づくり」に焦点を当てて研究を行った。様々な関わりの場面を設定しようと、「日常でできる取組」、「行事での取組」の両面から主題に迫ったが、校種が異なっても、学校生活のあらゆる場面で子ども達同士の関係を深められるという点では共通していた。教師が活動のねらいを明確にし、入念な準備・計画のもとに実践することで、子ども達が意欲的に活動する様子が見られた。意図的に関わりの場面を増やすことは、現状の人間関係に満足している子ども達や人間関係を築くことに苦手意識をもっている子ども達にとって負荷を感じるものとなるのかもしれない。しかし、それを乗り越え、新たな人間関係を築き、多様な生き方を受け入れることこそが成長なのではないだろうか。たくさんの友達と関わること、相手と思いが通じ認め合えることは素晴らしいことである。これを子ども達自身が実感して、自分の言葉で語れることが大事なのではないだろうか。子ども達の活動後の感想には、次のようなものがあった。

- ・話しているとお互いに心が開けて理解を深められた。
- ・最初は面倒だと感じていたが、やってみるとみんなのことを知ることができて楽しかった。
- ・「思い」が書かれたカードに囲まれているとみんなの希望に囲まれているようでうれしい。
- ・目に見える目標があると、互いの気持ちを知ることができて、相手を励ますこともできると思う。

このことから、活動を通して子ども達は自分の思いを伝えることのよさやその必要性を感じることができたと考えられる。

目標を達成する過程が分かる掲示物や、一人一人の思いが示された掲示物を目にすることで、子ども同士の新たな会話やつながりが生まれる場面も見られた。互いを認め合うことのよさや仲間と一丸となって目標を達成できたという喜びを実感するにあたり、相手の思いを受け止め、自分の思いを自分の言葉で伝えるという双方の関わりを育むのに、作成した掲示物がその一助になったと考えられる。しかし、掲示物による可視化は補助的な役割を果たすものとして考えたい。

今回の研究を通して、子どもたちの「もっと人を知りたい、関わりたい」、「仲間と協力して何かを成し遂げたい」という意識は十分に高めることができた。心をつなぐ大切さを知った子ども達は、この先の学校生活を通してその経験を積み重ね、人間関係を築く力をより一層高めていこう。

一人一人が信頼しあい互いが必要とされ、生き生きと人と関わる中で、よりよい人間関係を築く力が育む指導について今後も追求していきたい。

最後に、この研究に貴重なご指導ご助言やご支援をいただいた先生方、特別活動研究会・研究部会ならびに研究員所属校の校長先生、教職員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

【指導助言者】

川崎市立小学校特別活動研究会長（川崎市立向小学校校長）

高山 幸治

川崎市立中学校教育研究会特別活動部会長（川崎市立塚越中学校校長）

金澤 幸男